眼前口頭

○今はいかなる時ぞ、いと寒き時なり、正札をも直切るべき時なり、生殖器病云々の賣藥廣告を最も多く新聞紙上に見るの時なり。附記す、予が朝報社に入れる時なり。

○代議士とは何ぞ、男地獄的壯士役者と雖も、猶能く選擧を爭ひ得るものなり。試みに裏町に入りて、議會筆記の行末をたづねんか、裁りて四角なるは安帽子の裏なり、貼りて三角なるは南京豆の袋なり、官報の紙質殊に宜し。

○啾々を鬼の哭くといふは非なり、こは一樂絲織若くは縮緬の、鹽澳繻珍の類と相觸るゝをいふなり、紳士淑女の途行く音をきゝて知るべし。

○世に茶人ありて、せめて色とも名のつくことを得ば、今の小説家の望は足れるなり。されどもこれは目的にあらず、目的は孜々として倦まず、書肆の倉を建つるに在り。

○今の小説と、ながらとは離る可からず。寢ながら讀む、欠伸しながら讀む、酒でも飲みながら讀む。されどこの讀むといふことより、代金の手前といふことを差引きて、若殘餘あらば、そは小説家が社會に與ふる偉大の功益なり。

○明治の政治史は、伊藤山縣黑田井上後藤大隈陸奥板垣松方が名を、いやでも脱すること能はず、今の自ら政客と稱する者に至りては如何、芳を千載に傳ふる固より難し、寧醜を萬世とはいはず、わづかに其日々々の新聞紙に遺す。

○されども歴史とは、不幸なる世の手控へなり、くら闇の恥をあかるみに出すものなり。憂目は虎の皮の留まれるが故に、敷棄にせらるゝ如く、人の名の留まれるが故に、呼棄にせらる。

○およそ人は、姿を畫につくられざる程なるをよしとす。畫につくらるゝ人の、壁に貼られざるは稀なり。即ち、英雄豪傑は壁に貼らるゝものなり。

○總理大臣たらん人と、われとの異なる點を言はんか。肖像の新聞紙の附錄となりて、徒らに世に弄ばれざるのみ。

○拍手喝采は人を愚にするの道なり。つとめて拍手せよ、つとめて喝采せよ、渠おのづから倒れん。

○學士と精錆水とは、製法に於て酷しく相似たるものなり。先づ大いなる桶に藥を盛り、これに無數の小瓶を投入れ、其ぶく〳〵たる音を發するを待ちて、一々取上げて口紙を貼るなり。是れ卒業證書授與式なり。われは精錆水の吟香翁を富ましたるを聞けども、未學士の國家を富ましたる者あるを聞かず、門前の松尾のみ稍富みしとなり。

○途に、未學ばざる一年生のりきみ返れるは、何物をか得んとするの望あるによるなり。既に學べる三年生のしをれ返れるは、何物をも得るの望なきによるなり。但し何物とは、多くは奉公口の事なり。

○所謂政客の節を重んぜざるを以て、娼婦に比する者あれども當らず。賣る可き筈と、賣る可からざる筈と、筈たがへり。娼婦は鑑札を有す、至公至明たり。政客は有せず。

○兒を生まば女の事なり。誤まて娼婦となる

とも、代議士となることなし。

○一生の思出、代議士たらんとすといふ者あるを笑ふこと勿れ、寧渠等は見切賣の勇氣ある者なり。已に見切賣なり、ひけ物きず物曰く物たるは論を俟たず。

○選む者も愚なり、選まるゝ者も愚なり、孰れか愚の大なるものぞと問はゞ、答は相互の懷中に存すべし。されど愚の大なるをも、世は棄つるものにあらず、愚の大なるがありて、初めて道の妙を成すなり。

○われは今の代議士の、必ずや衆人が望に副へる者なるべきを確信せんと欲す。衆人曰く、金がほしい。故に代議士は曰く、金がほしい。

○日本は富强なる國なり、商にもよらず、工にもよらず、將農にもよらず、人皆內職を以て立つ。

○このたびの文相の世界主義なればとて、日本主義なる大學派の人々のために說をなす者あれども、そはまことに無用の心配なり。何となれば、再言す何となれば、主義を持することと、箸を持することとは自ら別なればなり。

○渠はといはず、渠もといふ。今の豪傑と稱せられ、才子と稱せらるゝ者、いづれも亦の字附きなり。要するに明治の時代は、「も亦」の時代なり。

○男のほれる男でなけりや、眞の年增は惚れやせぬ。窮めたりといふべし。されども惚れらるゝは、附入らるゝなり、見込まるゝなり、弱處にあらずんば凡處を有するなり。程や容子や心意氣や、其何れを以てするも、われより高き人のわれに惚れるといふの理なし。

○普遍の解說に從へば、緣はむすぶの神業に歸すと雖も、これとても都々逸以外に存立す可くもあらず。おもふに結婚は、一種の冒險事業なり、識らぬ二人を相擁かしめて、これに生涯の德操を强ふるなり。

○統計上、年々離婚の增加するは人の知る所なり。妻を迎ふるに同居籍を以てするもの、亦將に漸く多からんとす。古の所謂人倫の大綱とは、わづかに朝夕顏を見交はすに過ぎず。

○賣女が手管の巧なりとも、竟に智にあらず、三つ蒲團の上に於て初めて生ずる習慣なり。若今の夫妻間に、若干の德ありといはゞ、恐らくは膠をかけ合せたる時に於て、初めて生ずるそれも習慣ならん。

○樂は借にすべし、いづれ一間買ふべき棧鋪なればなり。苦は借にす可からず、高利貸が門に合乘を停むるの要なければなり。

○敢て貞節のみとは言はず、身に守る者いよいよ多く、心に守る者いよ〳〵少し。心身の二字妥當を缺かば、宜しく表裏と改むべし。道德は必ずしも實踐におよばず、口先のものなり、寧刷毛先のものなり。霞の光のありとのみにて、雲の影のなきも可なり。治まる御代の景物なり、御愛敬なり。

○おもへらく、親子兄弟、是れ符牒のみ。仁義忠孝、是れ器械のみ。

○涙ばかり貴きは無しとかや。されど欠びしたる時にも出づるものなり。

○熱誠とは贋金遣ひの義なり。註に曰く、其目的の單に製造するに止まらず、行使するに在るを以てなり。

○眞實、摯實、堅實、確實、これらは或場合に於ける活字の作用に過ぎず。卽ち今の精神界を支配するもの、勢力を以ていはゞ活字なり。これを六號にするも五號にするも、廣告料に於て差違なく、四號にするも二號にするも、工手間に於てまた〳〵差違なし。

○官人のために氣を吐くも、民人のために氣を吐くも、一つ口は同じ口なり、怪むを要せず。達辯と訥辯とは正反對のものなれども、共にタチツテトの行に屬す。

○國家といはず、箇人といはず、清まばタメなるべきも、濁らばダメなるべきこと、これも假字より出でたり。

○犧牲に供すとは面白き語なり、天神地祇は之れを看行すのみ、何日ともなしに人の取下げて、多くは自ら啖ふなり。

○泥棒根性なきものは人にあらず、これありて初めて世に立つを得べし。格をいへば豪傑たり才子たり、分をいへば强盜たり巾着切たり、素は一なること今更にあらず。

○人は殺すよりも、殺さるゝに難きものなり。殺すよりも、殺さるゝに資格を要するものなり。ねがはくは殺されん、殺さるゝを得ずば、ねがはくは殺さん。殺さず殺されざるも、猶人たるの甲斐ありや疑はし。勿論こゝに殺すといふは、刃に血塗る事なり。

○われは今の文學者の品位の、いかばかり高しとは得言はざれど、嘔吐を催すと學堂氏のいへるは稍過ぎたり。氏はおもに假名垣時代を見たるにはあらざるか、年も人も漸く遲り來れるを知らざるにはあらざるか、伊藤侯が十年前の政治家なるとともに、學堂氏も亦十年前の論客たるなくんば幸ひなり。

○小說家とは何ぞや。小說にもならぬ奴の總稱なり。われは之を以て、最も簡單なる、最も明白なる、恐らくは最も公平なる解釋とす。

○何故にといふ語こそ、沒風流の極みなれ。說明し得べきと、得べからざるとの間に、妙不妙の別ちは存するなり。豆腐を好む者にむかひて、いかなるを味の妙となすと言はゞ、それはとばかり執しも逡巡すべし。卽ち妙とは、說明すべきものにあらず、說明し得べきものにあらず、もし其幾分を說明し得たりとせば、說明し得たる幾分は、已に其妙を失へるものなり。

○不幸も弔はるゝ程たるは、猶樂しきものなり、これや限りの眞の不幸は、竟に弔はるゝことなし。

○あとなる人のおのれと同じく、溝飛越えしを見て、ほいなきものに思ふことあるも人の性なり。あとなる人の己とおなじく、溝に陷りしを見て、氣味よきものに思ふことあるも人の性なり。樣々なるが如しと雖も、しかも是れ同一人の性なり。

○わが世に大人なるものありや、君子なる者ありや。口にしば〳〵大人君子をいふ者は、手にしば〳〵追剝をなす者なり。後の世の人の、前の世の人を捉へて、身の箔となすに必要なる威嚇文句を、字に書きて大人君子とは云ふなり。

○夙に何々の志ありなどいふも、後人の附會なり、傳記家の道樂なり、立志編に限りて用ひらるゝ形容詞なり。偉人たらんことを欲ひし人の、偉人たりしことなく、多くは其邊の受附に隱れたまはず、曝されたまへり。

○有る智慧を出すに慣れたる果は、無き智慧をも絞るに至るものなり。凡人たれ、凡人たれ、勉めて凡人たれ、是れ處世の第一義なると共に、修身の第一義なり。めでたく凡人の業を卒へたる時に於て、較すぐれたるものあるは、自己も猶よく認め得べき事なり。

○偉人たるは易く、凡人たるは難し。謹聽すべき逸事逸話は、凡人に多く偉人に少し。われは今、世を同うせる人々のために、頻に逸事逸話を傳へらるゝの偉人多きを悲む。

○問うて曰く、今の世の秩序とはいかなるもの

ぞ。答へて曰く、錢勘定に精しき事なり。

○強善は一箇の商法なり、文明的商法なり。

官に金穀を養育院に出すに止まらず、姓名を新聞廣告に出す。

○陰德あり、故に陽報あるは上古の事なり、近代に入りては陽報あり、故に陰德あるなり。盛年重ねて來らず、こゝを以て學ぶべしと古人は言ひ、遊ぶべしと今人は言ふ。今は古にあらず、義理を異にする怪むに足らず。

○恩は掛くるものにあらず、掛けらるゝものなり。漫りに人の恩を知らざるを責むる者は、己も畢竟恩を知らざるものなり。

○恩といふもの、いと長き力を有す、幾たび報いるも消ゆることなし。こゝに於てか賣る者あり、忘るゝ者あり、枷と同義たらしむ。

○低善なる語をきく毎に、偽りにも善を行ふ者あらば、猶可ならずやとわれは思へり。社會は常に、偽善に由りて保維せらるゝにあらずやとわれは思へり。

○若し國家の患をいはゞ、偽善に在らず偽惡に在り。彼の小才を弄し、小智を弄す、孰れか偽惡ならざるべき。惡黨ぶるもの、惡黨がるもの、惡黨を氣取る者、惡黨を眞似る者、日に倍ゝ多きを加ふ。惡黨の腹なくして、惡黨の事をなす、危險これより大なるは莫し。

○まことの善とまことの惡とは、醫の内科外科の如し、稱は異れども價は一なり。亂世の英雄なるもの、まことの惡ならば、治世の好賊なるもの、まことの善なり。偽惡の出づるもこれが爲のみ、偽善の出づるもこれが爲のみ。

○賢愚は智に由て分たれ、善惡は德に由て別たる。德あり、愚人なれども善人たり。智あり、賢人なれども惡人なり。德は縱に積むべく、智は横に伸ぶべし。一は丈なり、一は幅なり、智德は遂に兼ぬべからざるか。われ密に思ふ、智は兇器なり、惡に長くるものなり、惡に趨るものなり、惡をなすがために授けられしものなり、苟くも智ある者の惡をなさざる事なしと。

○更におもふ、人生の妙は善ありて生ずるにあらず、惡ありて生ずるなりと。世に物語の種を絶たざるもの、實に惡人のおかげなり。吾をして歷史家たらしめば、道眞を傳ふるに勉めんより、時平を傳ふるに勉めん。吾をして戲曲家、小說家、若くは詩人たらしめば、徒らに神の御前に跪かんより、惡魔とともに虛空に躍らん。

○人の常に爲さざるによりて善は勸むといひ、常に爲すによりて惡は懲すといふ。勸善懲惡なる語の、由來する所此の如くならず とするも、波及する所此の如し。

○善も惡も、聞ゆるは小なるものなり。善の大なるは惡に近く、惡の大なるは善に近し。顯るるは大なるものにあらず、大なるものは顯るゝことなし。惡に於て殊に然りとす。

○善の小なるは之を新聞紙に見るべく、惡の大なるは之を修身書に見るべし。

○勤勉は限有り、惰弱は限無し。他よりは鬪はますなり。己よりは奮ふなり、何ものか附加するにあらざるよりは、人は勤勉なる能はず。惰弱は人の本性なり。

○元氣を鼓舞すといふことあり、金魚に蕃椒水を與ふる如し、短きほどの事なり。

○懺悔は一種ののろけなり、快樂を二重にするものなり、懺悔あり、故に悛むる者なし。懺悔の味は、人生の味なり。

○打明けてといふに、已に飾あり、偽あり。人は遂に、打明くる者にあらず、打明け得る者にあらず。打明けざるによりて、わづかに談話を續くるなり、世に立つなり。

○奠都三十年祝賀會の、初めは投機的におもひ附かれしものなること、言ふを俟たず。これ

が勸誘に應じたる人々の意をたゝくに、多くは勤王論の誤解者なり。たのもしき東京市の賑ひといへば、車に乘れる貧民の手より、車を曳ける紳士の手に、一夜の權利を移すに過ぎず。

○知己を後の世に待つといふこと、太しき誤り、なり。誤りならざるまでも、極めて心弱き事なり。人一代に知らるゝを得ず、いづくんぞ百代の後に知らるゝを得ん。今の世にやくざなる者は、後の世にも亦やくざなる者なり。

○己を知るは己のみ、他の知らんことを希ふにおよばず、他の知らんことを希ふ者は、畢に己をだに知らざる者なり。自ら信ずる所あり、待たざるも顯るべく、自ら信ずる所なし、待つも顯れざるべし。今の人の、ともすれば知己を千載の下に待つといふは、まこと待つにもあらず、待たるゝにもあらず、有合はす此句を口に藉りて、わづかにお茶を濁すなり、人前をつくろふなり、到らぬ心の申譯をなすなり。

○知らるとは、もとより多數をいふにあらず。昔なにがしの名優曰く、われの舞臺に出でて怠らざるは、徒らに幾百千の人の喝采を得んがためにあらず、日に一人の具眼者の必ず何れかの隅に在りて、細かにわが技を察しくれるならんと信ずるによると。無しとは見えてあるも識者なり、有りとは見えてなきも識者なり、若し俟つ可くば、此の如くにして俟つ可し。

○かしこきは今の作家や、われたゞ一つを傳ふれば足るといひて、さるが故に平生勉むるにあらず、さるが故に平生なぐるなり。知己を待つこと、數ひく弓のまぐれ當りを待つが如し。

○ほまれは短く、恥は長し。譽れは身をつゝむものなり、頭にかゝるものなり、恥は身をそぐものなり、面にのこるものなり。つゝみて懸かるは雲の如し、吹かば飛ぶことあるべく、そぎて遺るは藏の如し、拭へども去ることなかるべし。譽れなきも恥にあらず、恥なきは譽れなり。ほまれを求めんよりは、恥を受けざるに如かず、されど譽れもなく、恥もなきを世は人といはず、恥とほまれと相半したる間に於て、人の品位は保たるゝなり。

○唯それ活字の世なり、既に言へりし如く、活字に左右せらるゝ世なり。榮と辱と、一箇の活字を置換へたるに過ぎず。萬朝報が日々市内の死生を記すを見て、人は生れてより死するまで、遂に活字の緣を離れざる者なるをおもふ、勤くとも六號活字を脫離し能はざる者なるをおもふ。

○優れるが故に勝つなり、劣れるが故に敗けるなり。强者は何の度、何の點、何の域にまで弱者を拯はざる可からざるか。いつまで草のいつ迄も、唯限り無くといはゞ、强者は己のために勝ちて、他のために敗けざるを得ず。

○力の强弱なり、理の是非にあらず。しかも代々、弱者の理に富めるが如き觀あるは、一に攻守の勢ひを異にするに由るなり。弱者の强者にくらべて、理をいふに都合よき地位なるによるなり。愚癡や、怨みや、泣言やを繰返すの便宜あるによるなり。要するに弱者の數多ければなり、口喧しければなり。

○强きを挫き弱きを扶く、世に之れを俠と稱すれども、弱に與せんは容易き事なり、人の心の

○襲するに分あり、過ぐれば卽て貶するなり。世に碑文書きほど、嘲罵の極意を辨へたるはあらじ。さもなきに父祖の墓をのみ輝かさんは、却て父祖の業を辱しむるものなり。

○死せる者は各中に行くなり、生ける者は遊廓に行くなり。葬るに自他の別ありと雖も、其共同墓地たるに於ては一なり。

自然なり。義理名分の正しき下に、强に與せんはいと〳〵難し。隅ゆる胸の苦少きを幸福といはゞ、弱者は强者よりも寧幸福なり。

○劍を以てするも、筆を以てするも、强者は遂に弱者を扶くることなし、長く扶くることなし。弱者を扶くるは弱者なり、どの道のがれぬ弱者なり、同病相憐れむに過ぎず。

○正義のために起つといふは、身正義に代れるなり。貫き能はで斃れたるとき、正義は猶存在するものなりや否や、埋沒せられざるものなりや否や。

○貧は强ち恥辱にあらざる可きも、さりとて到底榮譽にあらず。まづしき也、とぼしき也、憂ふるに人さま〳〵の輕重ありとも、孰か心の奥を問はれて、富に優るといふ者あらんや。貧を誇るは、富を誇るよりも更に陋し。

○濫せざるは罕なり、世に淸貧なるものあるべしとも覺えず。先ごろ人の之を言爭へるも、概ね字義に拘泥したるの論のみ。富は餘れるなり。貧は足らざるなり、鹽噌の料に逐はるゝも、酒色の債に攻めらるゝも、算盤の合はざるは一なり、貧は一なり。必要を辨ずる能はざるを貧といはゞ、貧に淸濁の別ちあるなし。卽ち淸貧とは、寡慾を街ふに過ぎざる假設文字なり。

○富は手段を要す、此に於てか貧に安んずといふことあれども、實は安んずるにあらず、安んぜざるを得ざるなり、餘儀なきなり。人は銅貨の大よりも、銀貨の小を取る者也、取らざる迄も、其貴きを知れる者也。貧に安んずる者ならぬは明らけし。

○今日しばし貧に安んずとも、有りし昨日、有るべき明日を夢みんは定のものなり。悠然、潛然などいふも、つまりは負惜みの臺辭なり。

○訓れなきに富者の憎まれ、貧者の憫まるゝことあり。愛らぬ人の心の、身を富者の地位に置かず、貧者の地位にのみ置きて考ふるに因るなり。

○金庫は前にす可きものにあらず、後にす可きものなり。金庫に向へる人の膝は屈めるなり、うな垂るゝなり。金庫に倚れる人の肩は聳ゆるなり、そり反るなり。

○他人の迷惑を顧ず、慮らざるもの、傳記家を以て第一とす。知られぬが幸ひの手形足形を、さがなき此世に掘返して、おのが樂みに恥るなり。傳記家が文辭を修飾すればするだけ、他人の迷惑は加はるなり。

○われは傳記家の筆によりて、前人が罪過の數へらるゝを悲まず、功績の列ねらるゝを悲む。靈あり心あらば、地下に其人の然ばかりならぬを泣かんかとて。

○罪は遺す可し、功は遺す可からず。人の眞價は罪有るによりて誤られずと雖も、功有るによりて却て誤らる。迷惑は罪の大なるよりも、功の小なるを擧示せらるゝに在り。

○歌歌ひ、舞舞ふ人の常に曰ふ、やんやの聲はこゝぞの時に聞くことなく、さらでもの時に聞くこと多しと、巨人、偉人、大人なる者の傳記に就ても、われは此慨たきを保する能はず。

○人間が標準相場は、功名を以て定む可きにあらず、假なれば也。過失を以て定む可し、眞なれば也。

○褒するに辭は限有れども、貶するに限無し、例せば利口といへる唯一つのほめ言葉に對し、馬鹿、阿房、間抜け、抜作、とんま、とんちきなど、惡口は數ある如し。世とて人とて、到底誹られで果つまじきことは、これにて知るべし。

○謂はゞそやすは義理づくなり、けなすは眞けんなり。人のたづぬるに過へば、一はまあ爾言

つて置くのさといひ、一はそれが當前ぢやないかといふ。

○恐る可きもの二つあり、理髪師と寫眞師なり。人の頭を左右し得るなり。

○さる家の廣告に曰く、指環は人の正札なりと。げに正札なり、男の正札なり。指環も、時計も、香水も、將又コスメチックも。

○つとめて穿鑿すべし、つとめて穿鑿すべからず。かく反對せる二箇の用意を、一身に負ふべきは歴史家なり。爛漫たる嶺の櫻と見しは、白雲なりしと言ふとも、水蒸氣の凝れりしと迄は言ふこと勿れ。陷り易き歴史家が弊は、穿鑿家たるに在り。

○されど水蒸氣と知らず雲を敘し、雲と知らず櫻を敍するが如きは、最も愚劣なる歴史家の事なり。

○詩は建國のものにあらず、亡國のものなり。建つるよりは、亡ぶるに姿かなへり、品具はれり。畏くも後醍醐、後村上の帝を首めたてまつり、南朝の歌集の極めて誦すべく、北朝の一として看るに足らざるが如き、轉ずればやがてよき例證にあらずや。

○亡國の臣など呼ばれぬる人の、いかばかり風情に富みたりけんと、おろかしき事をも時には想ひ出さる。こはわれの日本の民なるが爲か、深編笠の浪人姿を、土間の一二三邊りに在りて哄笑したる日本の民なるが爲か。

○那翁が雄圖の遺憾なく遂げられたらんには、今の如く我邦に最眞を有することなかるべし。德川氏の治下に出でたる歴史なるにも拘らず、一枚上に置ける秀吉の如きも、亦然らん。

○例を低きに取らば佐倉宗吾を看よ、大方の人の渠に動かさるゝは、奮ひて起てる初めなり、中ばなり、終りにあらず。願達きて渠が身の全からば、稱する者九分を減ずべし。

○目的は巔に在れども、山に遊ぶの快は、幾曲折せる坂路を攀づるに在り。登れる者は下らざる可からず。

○めでたきものは平凡なり、めでたき正月の生活は、人皆平凡なり。

○淸寛に盛えんか、衰へんか、われ之を知らず。唯其動搖し、騷擾する毎に、急ぎて歸着點を明かにする者なるをおもふ。

○革命來を呼べる人あり、今猶呼ぶ人あり、俱に戯れなるべし。信仰なき民は、革命なる文字を議するといはず、弄するの資格だになき者なり。

○假に細民の群り起てりとせよ、襲ひ擊たんは何處なるべき。米屋、薪屋、炭屋、日濟し貸、及び差配人のでこぼこ頭のみ。

○口若くは筆もて富豪を責めんは、徒勞に屬す。幾千萬言を重ねて其暴横をいふとも、暴横より得たる權勢は、其間も猶暴横を逞しうし續くるの餘地あるなり。勝を必せざる攻擊は攻擊にあらず、攻擊の甲斐無し、敵をして防備を嚴ならしむるに過ぎず。

○非を遂げよ、希はくは非を遂げよ、非は必ず遂ぐ可きものなり。成功は非を遂ぐるに由りて來り、失敗は半途に非を悔い、非を悟り、非を悛め、能く遂げざるに由りて來る。

○獨り斃れて已まんとは、潔き言葉なり、唯夫れ言葉なり。われをして言はしめば、人一人なりとも多く倒したる後に、われは倒れん。ふびんなれども冥土の路連れ、彼れ斃れずば我れ斃れじ、獨りは斃れじ、斃るゝとも已まじ。

○萬歳の聲は破壞の聲なり。河原の石の積上げられたるよりも、突崩されたるに適す。

○今もちよん髷といふを戴きて、明るき都の

兩側町を行く人あり。頑迷なりといふ勿れ、固陋なりといふ勿れ、尠くとも主義を頭に載せたる人なり。

○理ありて保たるゝ世にあらず、無理ありて保たるゝ世なり。物に事に、公平ならんを望むは誤なり、惑なり、慾深き註文なり、無いものねだりなり。公平ならねばこそ稍めでたけれ、公平を期すといふが如き烏滸のしれ者を、世は一日も生存せしめず。

○どうせ世の中は其樣なものだ。この一語は、泣ける者をも慰むべく、怒れる者をも慰むべし。斯くして人口は年々增加すとも、減少することなし、めでたからずや。

○家あり、妻なかる可からず。妻が一家に於ける席順を言はゞ、蓋鼠入らずの次なるべし。人の之れを米櫃の保管者となせども、任に能く保管に堪へんこと覺束なし、恐らくはそれの輕重を單に報告するに止まらん。

○與へられし或權限をすら守り得ず、然かも與へざる或權限を超ゆる者は妻なり。

○凡ての場合に於て、妻は參考品なり。分別をなすに於て、なさしむるに於て、爲さざる能はざらしむるに於て。

○二人だから何うもならないといひ、一人だから何うかなるだらうといふ。夫婦者のは晴れたる苦勞也。獨身者のは除れたる苦勞也。世に遣瀨なき思ひといふは、おほむね頭數を以て算出せられ判定せらる。

○少年諸君のために言はんか、腦病に倒れんよりは胃病に倒れよ。雜誌を買うて腦病に倒れんよりは、ひとしく學資の上前也、くすねる也、菓子を買うて胃病に倒れよ。腦と胃と、機關の因緣淺からずと雖も、士は一に名分を重んぜざる可からず。

○漫に隈板二伯を嗤ふを休めよ、人間らしき內閣を組織することに於て、二伯が功は沒す可からず。われらが知見の及ぶ限りを以てすれば、何れは人間の手に由りて造らるゝ內閣の、斯の如く明白に、寧斯の如く巧妙に、人間の眞情を露出といはんよりは表示し、表示といはんよりは捧呈し得たるもの無し。是實に世界に於て、空前の事なるとともに、恐らくは亦絕後の事ならん。但だ衆の望の、かく迄に人間らしき內閣を得んと欲したるに在りしや否ずやを知らずと雖も、今にして思へば藩閥打破を疾呼せる渠等が聲の、頗る人間らしかりしをわれは歎稱せざるを得ず。

○一日も政治なかる可からず、玆に於てか月給を奪ひ合へり。一日も政黨なかる可からず、玆に於てか看板を奪ひ合へり。車宿の親方の常に出入場を爭ふの故を以て、內閣大臣の偶〻出入場を爭ふを不可とするの理をわれは發見する能はず。然り發見する能はず、車宿の親方の果敢なきが故にあさましく、內閣大臣の然らざるが故にあさましからずといふの理をも發見する能はず。

○憲政の美といふことを一言に約すれば、壯士の收入を增すといふ事なり。

○あゝ政治家よ、あゝ我邦今の政治家よ、卿等は唯一つなる刑の名をも知らざる者也、熟せざる者也、諳んぜざる者也。竊盜をなすも、强盜をなすも、ひとしく刑に處せらるべしと雖も、刑に於てすら名を重んぜざる卿等は、遂に何等の肩書をも有する事なし。

○政界今日の事を以て、狂的行動となす者あり。一應はきこえたり、再應はきこえ難し。愚

人の大人と相隣れるが如く、狂人は傑人と相隣れり。渠等を愚と言はんか、愚は猶賢なるものあり。狂と言はんか、狂は猶偉なるものあり。所詮彼等は愚人、狂人以下なるのみ。

○一の大人、傑人なしと雖も、隣れるを以て近しとせば、千百の愚人、狂人あらんも亦聊か慰するに足る。恰も一町先の酒屋の深けて起きざるによりて、角店の水臭きをも忍ぶが如けん。愚人の量、狂人の見だになき世となりては、政治といふもの、竟に一盃の寐酒に若かず。

○譬へて今回の變を言はゞ、總領の狡猾に人の氣を許すことなかりしも、次男の正直にふびんかゝりて、思はぬ相互の不手際を演出するに至りしなり。政治系統の外に立ちて、單に因果の理法よりすれば、國家を誤る者は大隈伯にあらず、板垣伯なり。

○政治運動とは、一名集會の渠なり。胸襟を披くと稱し、十二分の歡を盡すと稱す。幾たび盡すも十二分なると共に、幾たび披くも舊の胸襟なり。

○鬱勃たる不平の逝り出づる時、これを支へんは酒なるかな。敢て段落を見計ふを要せず、まあ一杯とさしたる洋盞の渠が手に移らば、疑ひもなく麥酒は其場の結論たるべし。

○それが何うした。唯この一句に、大方の議論は果てぬべきものなり。政治といはず文學といはず。

○絶えず貢獻なる語を口にする人あれども、おもふに腹のふくれたる後の事なるべし、尠くとも、一日三度の飯を食得たる後の事なるべし。片手業なるべし。小唄なるべし。

○與す可きにあらず驕りて瞰下すか、齒す可きにあらず謙りて瞻上ぐるか、處世の要はこの二つを出づること莫し。されば朝夕の辭儀口誼も、おまへは馬鹿だと言ふか、あなたはお利口なと言ふかの二つよりあること莫し。

○上流に比すれば樂多かるべし、されど下流に比すれば苦多かるべし。社會の勢力は總て中流の有なること、今更にもあらざる可き歟。維持するに於て。壞亂するに於て。

○米錢の事と限るにあらず、力をお隣のをばさんに假るに、裏家に在りては味方なり、慰藉を得るの便り也。表店に在りては敵なり、誹謗を招くの基也。理の本は斯くひとしけれど、情の末は斯くたがへり。

○下なる人は之を寄せ合ふなり、上なる人はこれを愉み合ふなり。同情なる文字の荐りに社會に稱せらるゝにも拘らず、解を求むればまさに斯くの如し。

○立身出世といふことあり、人のうまれの啻に恰からば、誰も爲し得るものに思ふは大なる誤り也。何處にか阿房の本體をとゞむるにあらざれば、立身出世はなり難し。立身出世を希はん者は、見え透きたる利口と、見え透きたる阿房とを兼有せざる可からず。兼有して而して巧に表出せざる可からず。

○虎といふものこそ可笑しきものなれ、身は動物園の鐵柵に圍まれて出づるに由なく、遂に自由なるまじき境と知りつゝ、猶其處に一分時を安んずる能はず、最も、最も柵に近き邊を、日夕往返し居るなり。

○軍人の跋扈を憤れる人よ、去つて淺草公園に行け、渠等が木戸錢は子供と同じく半額なり。

○山縣侯の手に成れるこの度の內閣は、雅味ある內閣也。一概に之を斥けんは、人類學攷究の價値を知らざる者也。組織と言はず、宜しく發掘と言ふべし。

○一の政治家なし、數多の政論家あり。一の政

論家なし、數多の政黨屋あり。强ひて家の字を附す可くば、われは之を一括して、經世家といふの妥當なるを信ず。經綸の經にあらず、經過の經なり、即ち世を經るなり、どうかかうか渡り行くなり。

○正札だからまけますといふ世にありて、特り看板に偽りなきは、彼の自ら有志家を以て任ずる輩也。一定の職なく、業なく、右往左往に唯わやわやと立廻りて、團體と稱す、志の有る所知る可きのみ。三輪のうま酒うまさうなる時に、多くの人は志を呼ぶものなり。

○弁走家といふも新しき營業也。抱へ車夫に給分を渡すことなくば、一層新しき營業也。

○曩に大臣の名の安くなりぬと說きし人に問はん、そは從來高上りせる我邦政治の價の、漸く平位に著かんとしたるものにあらざる乎。この度の内閣は如何、亂高下とも言ひかぬるなるべし。止むなくば休日越しの相場歟、開市の曉は直ちに改正せらる可き者なり。

○政治は人を亡し、文學は國を亡す。國のために政治をいひ、人のために文學をいふ。誤らずんば幸也。

○柳めて謂れ無き事なれども、姑らく傳ふるに隨せて、醫は仁術なりとせんか。古は人を活すが故也、即ち患を除く也、今は人を殺すが故也、即ち苦を去る也。字義と雖も世とともに推移するに、怪しうはあらじ。

○諺に曰く地震雷火事親父、是れたゞ危險の度を示したるに過ぎず。苦痛の量よりすれば、親父火事雷地震也。

○世は殿樣の謠なる哉、孃樣の琴なる哉。喝采の豫約せられたる如きものを以て、豫約せられたる如き喝采を得るも、猶長く悅べり。

○月給は人の價にあらず、されども月給は人の價なり。各人が遭遇する場合の多少より言はば。

○官吏が權勢を射利の用に供すること、今始まりしにあらずと雖も、過ぎにし事の迹をひそかに察するに、藩閥内閣に屬するは、地位のために獲たる儲け口なりし。政黨内閣に屬するは、儲け口のために得たる地位なりし。即ち前者は偶然也、偶然といふを得可し。後者は必然也、必然といふの外無し。彼の杉田を看よ、肥塚を看よ、草苅を看よ、所謂憲政の賜としては醜穢なりとは言はず露骨なりしを、われらは藩閥の前に恥ぢざるを得ず。

○風紀は一片の禁令の、能く支持す可きにあらず。學生を取締り、諸藝人を取締り、遊び人乃至物貰ひの徒を取締るといふも、畢竟威壓のみ。腐敗せしめよ、大に腐敗せしめよ、世を擧げて全く腐敗し盡すを得ば、尠くとも人互ひに感染し、浸潤するの患を除くに庶幾からん。

○彼方には火鉢を取除け、此方には茶棚を取除くるは、朝々の掃除にも面倒なる事也。掃除し畢りて顧みれば、塵は塗盆の上に猶鮮かなるべし。如かず機を得て、一時にどつと掃出ださんには。

○人は早晩、何の點と限らず墮落す可きに定まれる者也。强ひて墮落を抑へんは、發せしむるに過ぎず。あしき墮落をなさざるの前に、噫われはよき墮落を誨へんかな。

○一夕、大學生の語るを聽く。曰く、彼奴もなかなか進化したと。玆に進化とは、繻珍の紙入を藏するの義也、われらが認めて墮落となす所の者也。要するに學問は自己を諒解するの道にあらず、辯解するの具なり。

○今の教授法といふは、泥水清水の混合物也、併せ飲ましむる也。よしや溯れば清水の多分なりとも、攪き交ぜられし末は泥水の行渡れる

を以て、滿腹と稱す。宜なり渠等に淸水を見ず、吐かば必ず泥水なることや。

○漫然、他を罵りて無學といひ、無識といふは重寶なる、但しは卑怯なる語也。いかなる大學者、大識者に向つても言得べきと共に、いかなる大學者、大識者と雖も、之を言釋かんに途なき事なればなり。眞正の學者、識者の口より、この語の出でしをきゝし事なし。

○敎育の普及は、浮薄の普及也。文明の齎す所は、いろは短歌一箇に過ぎず。臭い物に蓋するに勉むる也。國運日に月に進むなどいふは、蓋する巧の漸々倍加し來ぬる事也。

○天保老人氏曰ふ、今を昔に比ぶるに、男次第に奸く、女次第に醜し、是れ何が故ぞと。戲謔にはあらざるべし、眞ならばげに是れ何が故ぞ。未能く答ふるを得ずと雖も、われは敢て風俗上の問題となさず、敎育上の問題として、之が因由をたづねんと欲す。

○女といふは榮ある者哉、紅きもの、白きものもて彩るを得るなりとは人の言也。女といふは效なき者哉、紅きもの、白きものもて彩らざるを得ざるなりとはわが言也。

○聖賢の道といふものこそ、いと心得ね。大方の場合に於て、女子は卽ち色なりと解し、格外に之を忌み怖れたり。戒を以てするも、利を以てするも、つまりを言はゞ欺く也。總ての意味の上に、敎といふは元アザムキ也。僅に女一人を欺き得ず、何者をか欺き得ん。女は欺く可し、欺かば足りぬべきものなり。

○炊がざれば米は食ふにたへず、炊ぐは當然のみ。女を欺くに何の罪ぞ。

○たま〳〵女の僞りを陳ずることありとも、たゞす勿れ、責むる勿れ、とがむる勿れ。僞りかあらぬかをさへ、問ふに及ばず。女の譫は、唯聞いて置けば宜しき事也。

○女子の貞節は、貧の盜みに同じ。境遇の强ふるに由る。

○涙以外に何物をも有せず、女の涙は技術なり。

○女は猶鶯の如き者か、羽色のために拂はるゝよりも、啼音のために拂はるゝ價也。最もよく玩弄に適したるを、最もよき女とは謂ふなり。

○嘗て女の手に、劍を執れる世もありき。鬪へる也。扇を取れる世もありき。舞へる也。今は只男の肩に懸くるか、頸に懸くるかより能無き世となりぬ。寢ぬる也。

○才を娶らんよりは、財を娶れよ、女の才は用なきもの也、善用することなきもの也。なまなかなるは不具たるに殆かるべし。財あるに如かず。財を獲たらんは、才を獲たらんより耐へ易く、忍び易し。

○人の妻を遇するを見るに、之を粧飾品となす者は座敷に置き、日用具となす者は臺所に置く。共に動產たり。妻みづからも亦身の置場、据場、寧寢處とより上の觀念を有するものなし。若これありとせば、そは粧飾品の風通を買はれざるを恨み、日用具の繻子を賣らるゝを怖るゝのみ。この時初めて、夫あるを覺るに過ぎず。

○凡て女子の心にとは言難し、身に夫あるを覺るは、滿ちたる時にあらず、缺けたる時なり。全き時にあらず、乏き時なり。謝すべき時にあらず、訴ふべき時なり。恩に非ず、怨也。

○已に動產と稱す、妻を迎ふるは一箇の富を增すなりといふ者あるにわれは抗論せざる可し。醫者樣の物置に、菓子、鷄卵の空箱の積まれたるを富なりといふ者あるにも、われは又亦抗論

せざる可し。

○文字ばかりをかしきは莫し、實を傳へざるは莫し。内助の二字の如き、殊に然り。單に鍋釜を整理し、配置し、按排するの謂とせんも、猶諸買物通帳は、常に夫の前に提供せらるゝにあらずや。世に内助の功なんどいふもの、到底有得可しとも覺えず。

○彼の妻を見よ、飼犬を見よ、大差ありや、餌を與ふることを忘れずば、吠ゆることなし。

○寒い晩だな、寒い晩です。妻のナグサメとは、正に斯の如きもの也。多くもこの型を出でざる受答への器械のみ。之に由りて、世の寂寥を忘るといふ者あり、げに能く忘るべし、希望をも忘るべし。

○前なる夫に告ぐ、渠は今公に、後なる夫の膝に颯りて笑ふ也。後なる夫に告ぐ、渠は今密かに、前なる夫の墓に詣でて泣く也。いづれぞ心の誠なる。いづれも形の僞り也。

○生殖作用は、生活作用也。飢をざらんが爲といふこと、女子が結婚の一條件たるを以て見ればば。

○豫め轉賣を諾されたる者は娼妓なり。されども權利者の誤解をまねくこと多し。この誤解を招くこと無き者は妾なり。

○雜誌、新小説の懸賞規則を見るに、當選者の肖像を寫眞版となし、之を卷頭に掲ぐべしとあり。あゝ明治の青年は、斯の如くにして犧牲に供せらるゝ也、葬らるゝ也。

○戀とは口にうつくしく、手にきたなき者也。こは嘗て神聖論を拒否するにあたりて、戀とはうつくしき詞もて、きたなき夢を敍するものぞとわれの言へるを、詳かにしたりとも、約かにしたりとも言得べきもの也。

○危きは世に謂ふ戀なるかな。一たびするも、十たびするも、符號を遺すことなく、痕跡を留むることなし。

○相見ば戀は止むべきか、相逢はゞ戀は止むべきか、相語らば戀は止むべきか。切に求めて休むことなきものは戀也。

○須らくわれも世につれて、相思ふを戀といふべし。最後やいかに、限りなきおもひの程を互に表示するに於て、通告するに於て、將又交換するに於て、唯一つなる方法は××××××にあらぬか。

○ふたりが戀の契約書にありては、××は證券印紙なり。之を貼用するにあらざれば、自己も猶效力を認めず。

○戀は親切を以て成立す、引力也。不親切を以て持續す、彈力也。疑惑は戀の要件也。

○夫婦は戀にあらざること、言ふ迄もなし。夫婦は戀の失敗者と失敗者とを結び合せたるものなること、亦言ふ迄もなし。「鮎をと思つたが蕎麥口の都合で蕎麥にして置くのだ」とは、われの既に言へる所なり。

○操手は子をなす事なし。夫婦の愛は肉より生ず。かの姻如なるものを看よ、そを四隣に吹聽して憚らず、以て儀式となすにあらずや。

○唄浮瑠璃は言ふにも及ばず、古の和歌の今に傳へて人の誠となすもの、戀となすものの多くは××也。俱に×××ことを望めり。いづれの邦の歴史と雖も、かげには必ず×××の伏在せる者なるを思ふ。

○劇にて見たる初菊は、いと率直なる婦人なりき。公衆の面前に於て、せめて一夜の祝言を强請せり。

○何故に女子は××ならざる可からざるか。何故に女子をして××ならしめざる可からざるか。女子に×××と信ずる者は、自己の零落を知らざる者也。相携へて途上を行くとせよ、妻の眼の何ものに注がれ、妻の眼に何ものの映

れるかを、夫は察知するの能力なき者也。況んや抑制をや。能力と言はざる迄も、妻が夜毎の夢の始終を、明かに聽く可き信用だに無き者也。

○希はくは安んぜよ、滿天下の女子諸君。現行犯ならざる限りは、すべての女子は××しき者なり。

○恐らくは×××は、法律の禁ず可きものにあらざるべし。

○われは貞婦、烈女の傳を讀みて、かゝりし人のまことに在りけんよしを確信したり、嘆稱したり。されど若われと同じき世に在らしめば、もはや理窟の要なし、これはたまらぬとより多くを言ふ能はず。

○十年の語らひも、一言によりて去り去らるゝを夫婦といふ。よしや俱々、あかぬ中にも仔細ありて、啼いてくれるか初杜鵑、血を吐く程の別れをなしたりとも、十日、廿日、一月を隔つれば心全く他人也。女子の進退は、毫も暦日と關係無し。

○戀は花か、色は實か。花の實となるは必然にして偶然也、偶然にして必然也。散れよ花、花は初めより散るに如かず。忘れよ戀、戀は初めより忘るゝに如かず。

○花間に月下に、言はぬ思の唯打對ひて果つべき生涯ならば、われは戀の神聖を疑はじ。彼れと此れとは俱に初戀の、つゆ動かぬ保證を公に得るものならば、われもさまでは疑はじ。

○戀ふるにいさゝかの價ありとも、戀はるゝに價なし。成就の一方より言はゞ、戀はまぐれ當り也、ぶつかり加減也、一寸したキッカケ也。

○獣身的戀愛となん、呼ばるゝものありとぞ。日に三たびは飯食ふべき身を獣げ來らるゝも、時に依りては迷惑なるものに思はる。

○戀と言はず、更に色と言はん。われは混ずることなかるべし。色とは富の副産物なり、屈託なき民の鬨の聲なり、今日の如くめでたきものなり。

○こゝを以て、われは一押二金といへる人よりは、一暇二金といへる人の炯眼に服せざるを得ず。其共に「をとこ」を三位に置けるも、故なきにあらず。男の器量を貨幣につもらば、僅に三錢四錢の顔剃代を以て上下する者なればなり。

○戀婦も丁稚も打交りて臥せる低き屋根の下と、坊ちやまも嬢様も各お座敷を有せらるゝ高殿の上と、所謂醜聞の孰れに多きかを比較し看よ。是亦餘裕の一例なるべし。

（自明治卅一年一月至卅二年三月）